

[論 文]

日本人大学生の英語学習における学力と動機に関するポートフォリオの有効性の検証

An Investigation of the Effects of English Studies Portfolios
on Japanese University Students' English Ability and Motivation米 田 佐紀子*¹ 西 村 洋 一*²

要旨

本研究ではポートフォリオを用いた指導によって、日本人大学生の英語学習に対する動機付けおよび学力向上につながるかYLE模試とアンケートを用いて検証した。分析結果では動機の主要因では明らかな有効性が示されなかったものの、異文化間接近回避傾向の得点が高い学習者の模試得点がポートフォリオ使用群では上昇したのに対し未使用群では大きく下降し、ポートフォリオ使用の有効性が示された。

キーワード：ポートフォリオ／動機／英語力向上

1 序論：研究の背景と先行研究

本研究は日本人学習者の英語学習への動機と英語力の向上に有効とされるポートフォリオの指導の有効性を検証しようとするものである。

英語が使える日本人の育成が2002年に文部科学省（以下「文科省」と略）から公表されてから10年になる（文部科学省2002）。ますますグローバル化が進む中で日本人の英語力の平均は高校卒業時で「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠¹（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment、以下「CEFR」と略）」のA2レベル（表1参照）と言われており、世界的に「自立した言語使用者」とされるB1レベルに達していない（根岸2008：399-414）。CEFRとは、人や物流の盛んなヨーロッパの人々のために国や言語にとらわれず学習者の熟達度のレベルを「何ができる

か（Can Do）」によって言語能力を測る尺度として、行動中心主義と複言語・複文化主義に基づいて欧州評議会が作成したものである（吉島・大島2004: 1）。CEFRの言語教育の向上を図るための一貫した基準などは日本の英語教育で今求められている事であり、その研究は多くの研究機関で行われていることから重要性がわかる（慶応大学外国語教育研究センター2009、日本独文学会ドイツ語教育部会、日本フランス語教育学会、大学英語教育学会教育問題研究会2011）。

欧州評議会はCEFRの目的、すなわち複言語主義、国際的移動性、言語の多様性の促進をするためのツールとして教育現場内外で用いることができるようにEuropean Language Portfolio(以下ELPと略)を作成した(CiLT, The National Centre of Languages 2007: iii)。ELPとは、言語や文化の多様性、国境を越えた人々の移動、複言語主義に基づくと共に、自分の言語能力や異文化経験を記録する道具であり、これによって学習者は言語を学ぶことで何を将来なし得たいのかを省みることを助けるものである。また、ELPはさまざまな言語や年齢、学習者個人の必要性に合うように作られている(CiLT, The National Centre for Languages 2007: iii-iv)。これらの点は欧州を対象としてい

*1 YONEDA, Sakiko

北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
子ども英語・英語 I (中級上)・グラマー

*2 NISHIMURA, Youichi

北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
社会心理学表1 CEFR、ケンブリッジ英検、TOEIC、STEP英検対応表²

CEFR レベル	Cambridge Examinations		TOEIC	STEP 英検
	Main Suite	Young Learners English Test		
C2	CPE			
C1	CAE		970～	1級
B2	FCE		850～	
B1	PET		650～	準1級
			570	2級
A2	KET	Flyers	470	
A1		Movers	345～390	
			～310	3級
Pre-A1		Starters	～280	4級
			～260	5級

※濃いグレーは対応するものがない事を示す。本来のCEFRにはPre-A1レベルはないがここではCambridge ESOLに従い記載する。

るとは言え、日本でも有効な理念だとして注目されている所以である。

上記の理念に基づいて作成されたELPは3部から成っている。まず、Language Passportにはスキルや経験、取得した検定などを記載したり、CEFRのCan Do statementsを見て自己評価を記入したりする。次に、Language Biographyには今まで触れた言語の種類や言語学習、異文化交流を経て獲得したスキル、どのように学んでいるかなどを記載する。3つ目のDossierにはこれまで目標言語を用いて作成した作文や認定証など自分の語学力の証明となるものを保存しておく。このようにELPは現在の自分の言語能力についての全体像を示すものであるため定期的に更新していくことが望ましいとされている(CiLT, the National Centre for Languages 2007: iv)。

ヨーロッパ日本語教師会(2005: 55)はポートフォリオを用いて自己の言語学習を省み、自分に必要なことを知り、目標を立てることが自立した学習者の育成に有効であると述べている。また、ELPに限らず、学習者としての自己評価や自己を振り返ること、目標を立てていくことは学習上有効だとする先行研究がある。今井(2007: 27、61)によれば、自己評価は学習の達成感が得られ次の学習への言動力となる。加えて、目標を決めるためには、現在の自分と将来の自分を比べ、

どのようなことができるようになりたいかを考えることが必要であるとしている。また、橋本(1983: 61、125-152)も長期的・短期的目標を持たせることについて学習の促進に重要であると共に、最も効果的な評価は生徒自身の自己評価であると述べている。以上のようにELPは自己省察のツールとして英語力および動機の向上に有効であると考えられる。

一方、ELPについて以下のような課題も指摘されている(ヨーロッパ日本語教師会2005: 57-58)。

- ・学習者による過大評価や過小評価、教師の評価との差異の扱い方が問題である。
- ・従来の試験とELPとの関連性が不透明である。
- ・ELPの情報が多すぎる。
- ・CEFR参照レベルと並行しているチェックリストの能力記述文が分かりにくい。
- ・ELPの普及率が低い。
- ・ELPとして認定されるには質、妥当性、透明性など欧州評議会が定める『ELPの原則および指針』に基づかなければならない。

ヨーロッパ日本語教師会(2005: 56-59)は、これらの課題を解決していくためには教育制度の中にELPを取り入れ、定着させていくことや、国や地域全体として取り組むことが望まれていると述べている。ここからELP発祥の地であるヨーロッパでも大きな課題があることが分かる。

以上のような課題はあるものの、日本が進むべき方向とその理念を活かして日本の英語教育に取り入れるべく、筆者ら平成23年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（以下「科研」と略）チーム³はELP Junior version (CiLT, The National Centre for Languages 2006)を参考に日本の現状で用いることのできるポートフォリオを作成し（資料1参照）、その有効性の検証を行った。科研における我々の研究では小学生から大学生までを対象にしているが、本論文では大学生に絞ってその効果の検証について述べていく。

2 リサーチクエスト

本研究のリサーチクエストは以下の通りである。

- (1) ポートフォリオを用いた指導を受けた学生のほうがそうでない学生より、国際的志向性や英語学習に対する動機が高くなるか。
- (2) ポートフォリオを用いた指導を受けた学生のほうがそうでない学生より英語力が上がるか。

3 データ収集：方法・参加者

3.1 方法

学力テストと英語学習動機およびポートフォリオに関する質問紙を用いて調査を実施した。

学力テスト：

CEFR参照レベルが明確に示されているケンブリッジ英検 Young Learners English Test（以下「YLE」と略）のFlyersのReading & Writing, Sample Paper (University of Cambridge ESOL Examinations 2011)（以下「模試」と略）を使用した。本来ならば12歳以上を対象としたMain SuiteのKey English Test（以下「KET」と略）を用いるべきであるが、所要時間と学力レベルの問題からYLEを用いることとした⁴。所要時間はKET (CEFR A2) が70分のところ、Flyers (CEFR A2) は40分である。参加者である学生の学力は大学入学時に実施されるTOEIC Bridge 180点満点中で、100点台～150点台であった。一律KETを実施することは不可能であることからFlyersの実施となった。また、本来4技能をテストすべき

であるが、Yoneda & Hughes (2010) による、中学生以上はリーディング・ライティングテストの結果が英語力の指標となるという結果に基づき、リーディング・ライティングテストを用いた。このことは、米田・西村・細川 (2011) におけるYLE模試得点とTOEIC Bridgeテスト得点間の相関係数でも確認された。これら先行研究の結果から大学生においてはリーディング・ライティングテストの結果が英語力の指標になりうると判断した。

英語学習動機に関する質問紙：

物井 (2009)、CEFRのCan Do (吉島・大橋 2004: 25、日本独文学会ドイツ語教育部会、日本フランス語教育学会、大学英語教育学会教育問題研究会、神保科研、酒井科研、大崎科研2011) などに基いて科研メンバーで作成した（資料2参照）。英語学習の動機測定尺度の12項目、国際的志向性尺度の22項目が含まれていたため全34項目であった⁵。これらの項目について「いいえ」(1) から「はい」(4) の4段階尺度で回答を求めた。

ポートフォリオ使用に関するアンケート：

ポートフォリオの使用について英語学習上、有効性を感じるかまたその理由について自由記載形式で実施した。

時期：

2012年4月（前期授業開始時）と7月（前期授業終了時）に実施した。

3.2 参加者

参加者は大学1年生対象の必修科目英語履修者37名であった。学生はすべて英語専攻ではない。全員入学時にTOEIC Bridgeを受験し得点と入学以前に取得したG-TECやSTEP英検などの情報に基づいてクラス分けされた2クラスが研究に参加した。

3.3 ポートフォリオ使用群と未使用群

対象となる2クラスをポートフォリオ使用群(12名)と未使用群(25名)に分けて実施した。

ポートフォリオ使用群は4月入学当初のTOEIC Bridgeテスト結果が130点台～150点台の参加者、未使用群は100点台～120点台の参加者であった。両クラスともCEFRに基づいた教科書を用い、日本人教師が原則英語を用いて指導を行った。

ポートフォリオ使用群では、ねらいをユニットごとに提示しポートフォリオ（資料1参照）を毎時間記録させた。動機や学力変化の変化量の比較によってポートフォリオ使用の効果を確認することができるかと判断した。

4 分析方法と結果

4.1 動機関連測度の得点化

動機関連の測度として、物井 (2009) において使用された国際的志向性尺度22項目と英語学習への動機を測定する12項目の尺度を用いた。国際的志向性尺度は八島 (2004) により4つの下位尺度で構成されることが想定されているため、「異文化友好オリエンテーション」(4項目)、「国際的職業・活動への関心」(6項目)、「海外の出来事や国際的問題への関心」(5項目)、「異文化間接近一回避傾向」(7項目)の下位尺度ごとに得点化を行った。まず、逆転項目の得点を逆転させたのち、各項目の得点を合計したものを項目数で割り、それぞれの得点とした。

英語学習の動機測定尺度として用いた12項目

については、逆転項目の得点を逆転させたうえですべての項目得点を合計し、項目数で割った。本研究では、これらの得点を英語学習における動機得点とした。

4.2 結果

検証1と2ではポートフォリオの視点を入れず、4月と7月の動機と学力について検証した。検証3、4ではポートフォリオ使用群と未使用群に分けて有効性の有無を検証した。以下仮説と結果について述べていく。

検証1. 4月に比べ7月の段階の方が英語学習の動機が高い。

結果 4.1に示した得点化により算出した動機関連得点について、測定時（4月、7月）ごとの平均値および標準偏差を表2に示した。*t*検定の結果も表2に示されている。分析の結果、いずれの動機関連得点においても測定時期について統計的に有意な差は見られなかった。

検証2. 動機関連得点の変化量はYLEの点数の変化量と正の相関がみられる。

結果 YLEの4月から7月の得点の変化量、および動機関連得点の4月から7月の得点の変化量を算出し、両者の相関係数を求めた。その結果は表3

表2 動機関連得点の測定時別の平均値と標準偏差および*t*値(*n*=35)

従属変数	4月	7月	<i>t</i> 値 (<i>df</i> =34)
英語学習に関する動機尺度	2.74 (0.46)	2.72 (0.50)	0.23
異文化友好オリエンテーション	2.95 (0.68)	2.94 (0.62)	0.17
国際的職業・活動への関心	2.42 (0.58)	2.49 (0.57)	0.85
海外の出来事や国際的問題への関心	1.78 (0.51)	1.90 (0.68)	1.20
異文化間接近一回避傾向	3.03 (0.52)	3.06 (0.47)	0.49

() 内は標準偏差

に示されている。YLE得点の変化量と異文化間接近一回避傾向との間に予測通り正の相関が見られた。また、英語学習に関する動機との間には有意傾向ではあるものの、中程度の正の相関が得られた。その他の測度については有意な相関は得られなかった。

検証3. ポートフォリオ使用群のほうが未使用群より動機が高い。

結果 英語に対する動機関連得点の変化量について、ポートフォリオ使用、未使用の群ごとに平均値と標準偏差を算出し、表4に示した。ポートフォリオ使用の有無条件別の平均値についてt検定を行った。その結果、いずれの動機関連得点につい

ても有意な差は得られなかった。

検証4. ポートフォリオの使用の有無によるYLE得点(学力)の変化

結果 ポートフォリオの使用がYLE得点(学力)の変化に与える影響を検討するために、ポートフォリオ使用群、未使用群ごとにYLE得点の変化量を算出した。平均変化量は表5に示されている。これらの得点についてt検定を行ったところ、有意な差は見られなかった。

ポートフォリオを使用した際に、もともと英語に対する動機の高い学習者に有効である可能性も考えられる。そこで、4月の段階での英語に対す

る動機関連の得点を指標に中央値を算出し、ポートフォリオ使用群、未使用群ごとに動機の高い群と低い群に分割した。ただし、ポートフォリオ使用群と未使用群の間で4月の動機関連得点に有意な差が見られた変数があったため、それらの変数による分析は行わなかった。そのため、英語学習に関する動機得点、海外の出来事や国際的関心得点、異文化間接近一回避傾向得点の3つの変数について群分けを行った⁶。YLEの得点の変化量を従属変数とし、ポートフォリオ使用の有無×4月の動機関連得点の高低群を独立変数とした2要因の分散分析を行った。その結果、異文化間接近一回避傾向得点を用いた分析のみ有意な結果が得られた⁷。各群の平均変化量は図1に示した。分散分析の結果、ポートフォリオ使用の有無、異文化間接近一回避傾向得点の高低の主効果は有意でなかったが、両要因の交互作用が有意であった($F(1, 33)=6.81, p<.05$)。異文化接近一回避傾向高群はポートフォリオを使用しない場合より使用した場合の方がYLEの得点が上がっていたが、異文化接近一回避傾向低群の場合にはそのような効果は見られなかった($F(1, 33)=7.90, p<.05$)。また、ポートフォリオ未使用群において異文化接近一回避傾向高群は異文化接近一回避傾向低群よりもYLEの

得点が下がっていた($F(1, 32)=5.05, p<.05$)。

5 ポートフォリオ使用に関するアンケート結果

ポートフォリオ使用群12名に「ポートフォリオの使用は英語学習上有効か」というアンケートを取った。回答方法は①有効である、②有効ではない、③どちらともいえない、の3択であり、回答の理由を述べてもらった。得られた回答数は8名であった。理由の文は原文をそのまま記載している。

回答結果数とその理由：

①有効である 5名

- ・自分ができなかったことを具体的に言葉にして書くことで、自分のことがわかり、わからないことを調べようと思えるから。
- ・授業の最後に授業の内容を振り返ることができるので有効だと思います。また、忘れてしまったこともポートフォリオを見直せば思い出せるのでいいと思います。
- ・理由は自分が理解していることと理解していないことを考える時間ができるからです。
- ・授業の最後に自分がどれくらいの実力であるか、振り返ることができるからです。また、質問の

表3 YLEの得点変化量と動機関連得点変化量との相関

	英語学習に関する 動機尺度	異文化友好オリ エンテーション	国際的職業・活動 への関心	海外の出来事や 国際的問題への 関心	異文化間接近一 回避傾向
YLE得点	0.33†	0.19	0.03	-0.21	0.34*

† $p<.10$, * $p<.05$

表4 英語に対する動機関連得点変化量のポートフォリオ使用群、未使用群別の平均値と標準偏差

従属変数	ポートフォリオ使用群 ($n=11$)	ポートフォリオ未使用群 ($n=24$)	t 値 ($df=33$)
英語学習に関する動機尺度	0.91 (0.38)	-0.01 (0.43)	1.03
異文化友好オリエンテーション	-0.07 (0.46)	0.01 (0.51)	0.44
国際的職業・活動への関心	0.18 (0.39)	0.01 (0.47)	1.06
海外の出来事や国際的問題への関心	0.07 (0.38)	0.13 (0.63)	0.29
異文化間接近一回避傾向	0.13 (0.30)	-0.12 (0.42)	1.01

() 内は標準偏差

表5 YLE標準化得点変化量のポートフォリオ使用群、未使用群別の平均

	ポートフォリオ使用群 ($n=12$)	ポートフォリオ未使用群 ($n=24$)	t 値 ($df=34$)
YLE 得点	0.02 (0.07)	-0.01 (0.08)	1.26

() 内は標準偏差

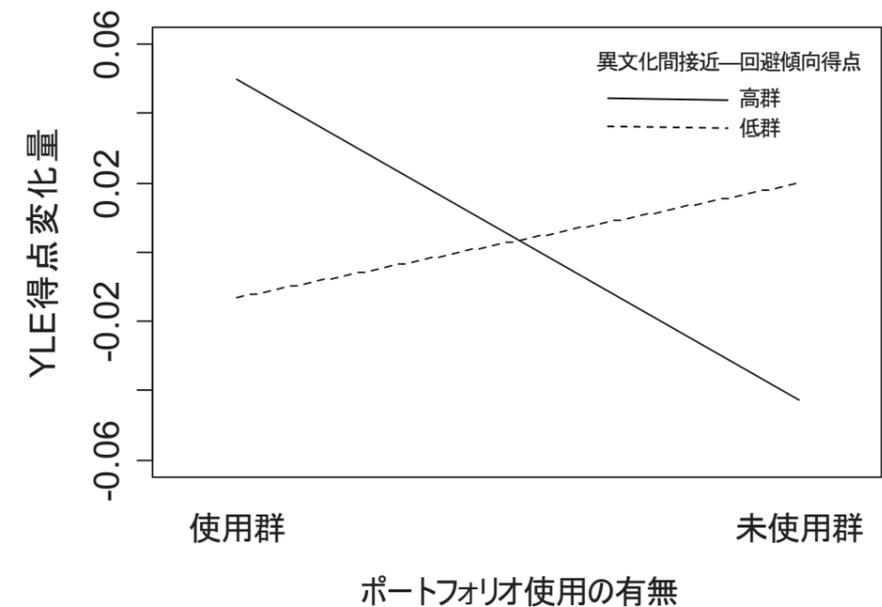


図1 ポートフォリオ使用の有無と異文化間接近一回避傾向得点の高低によるYLE得点の平均変化量

欄があることで気軽に先生と関わることができ、とても良かったと思います。

- ・ポートフォリオを使うことによって自分は何が分からないのか知ることができ、次回までの課題になるから。

②有効ではない 0名

③どちらともいえない 3名

- ・英語を学習するにあたってポートフォリオは、あってもなくても同じように思うからです。授業時間以外に開かないので、私自身はポートフォリオの効果あまり実感出来ていません。テストの点数を書き込む欄と先生への質問欄があるのは、便利だと思うのでこの回答にしました。
- ・そこまで意識して記入できていなかったから。
- ・私自身はあまり書いていなかったために、見直すこともほとんどありませんでした。だから、正直に言って役立ったかどうかは微妙なところです。しかし、後になってしてみると当時の自分と今の自分のレベルの比較ができるうえに、できない部分もすぐわかるので復習しやすいと思います。そう考えると、ポートフォリオは英語学習に役立つとも思いました。

6 考察

ここではまず統計分析の結果について考察し、その後、ポートフォリオを使用することの意義と課題を考察する。

検証1と検証2ではポートフォリオの視点を入れず参加者全体の4月時点と7月時点の変化量に着目し、検証3、4ではポートフォリオの使用・未使用について参加者を2つの群に分けて検証した。

検証1の「4月に比べ7月の段階の方が英語学習の動機が高い。」という仮説に対しては統計的に有意な差は見られなかった。大学に入ると受験がなくなり、英語学習そのものに対する理由もないことから動機が下がる傾向があることは、先行研究(米田・西村・細川2011)でも示された。大学生になってからの学習意欲の維持が課題である。その一方、「検証2. 動機得点の変化量はYLEの点数の変化量と正の相関がみられる。」の結果では、英語学習に関する動機との間には有意傾向ではあるものの、中程度の正の相関が得られ、YLE

の得点の変化量と異文化間接近一回避傾向との間に正の相関が見られた。このことから英語学習と関連する動機得点の上昇とテスト得点の上昇には関連があることが示された。一方、すべての動機得点との間に有意な正の相関がみられたわけではない。その理由として、後期に英語母語話者が指導者になるという期待感が影響していると考えられる。本科目は同じ教科書を用い、前期が日本人教師、後期が英語母語話者による授業という流れになっている。つまり、前期は日本人による英語の授業であるが後期には英語母語話者が指導者として入ることで「本物のコミュニケーション」が体験できる。このことに対する期待感が異文化間接近一回避傾向に示されたということが考えられる。また、異文化間接近一回避傾向は「異文化背景をもった人と関わりをもとうとする傾向」のことであり、授業で学んだ英語で異文化の他者とコミュニケーションをしようという動機が高まることは、YLEにより測定される英語力の向上に直接的に関わる要因であると考えられる。他方で、「国際的職業・活動への関心」や「海外の出来事や国際的問題への関心」は、長期的に見た場合は英語力の向上に役立つと思われるが、本研究のように短期的にはテストの結果と結びつきにくいという可能性も考えられる。

ポートフォリオの使用そのものについての使用群・未使用群との比較における検証結果(「検証3. ポートフォリオ使用群のほうが未使用群より動機が高い。」「検証4. ポートフォリオの使用の有無によるYLE得点(学力)の変化」)からはいずれの動機関連得点についても有意な差は得られずELPを用いた先行研究(ヨーロッパ日本語教師会2005)とは異なった結果が示された。ポートフォリオの使用の有無による学力の変化についても有意な差は見られなかった。この結果からはポートフォリオの有効性は示されなかったこととなる。ポートフォリオ使用のみの有効性は示されなかったものの、英語学習と関連する動機である異文化間接近一回避傾向との交互作用効果は有意であった。この交互作用効果により、異文化間接近一回避傾向高群においては、ポートフォリオを使用することが学力向上に有効であるとともに、ポートフォリオを使用しないことでテストの成績を下げ

てしまうという可能性があることも示された。異文化間接近一回避傾向の高い学生は他者と関わることを重視していると考えられる。ポートフォリオにより自分ができることとできないことを明確にすることは、どの程度他者と関わるができるかの目安となるため、そのような動機の高い学生には有効性の高いものと感じられ学習が向上すると想定できる。ポートフォリオがない場合にはそのようなメリットを享受することができず、他者と関わる術を身につけたいという自分の目標があいまいになり、結果として学習に負の影響を与えてしまうという可能性も考えられる。これらはすべて可能性であるため、異文化間接近一回避傾向の高い学生においてポートフォリオのある場合とない場合の学習状況がどのようになっているのかという点についてより詳細に検討していく必要があるだろう。

次に統計による検定とは別に有効性に対する感想を尋ねたアンケート結果について考察する。8名中5名が、英語学習においてポートフォリオを用いることは有効だと答えている。その一方で3名はどちらともいえないと答えている。今回の回答結果から、効果の有無を感じるか否かは授業外でポートフォリオを見るか否かという点にあると考察できる。学生たちにとってはポートフォリオの視点や使用が新しい経験で、自分の学習について書き込んでいく学生と戸惑いがいつまでも続く学生があった。ポートフォリオに何を記入すれば良いのか分からないという戸惑いを見せる学生に、理由を尋ねたところ、従来ならば取るに足らないとされていた事柄についても「できたこと」や「分からない事」として記録する目的や意義が理解できないとのことだった。一方、積極的に使用する学生に戸惑いや疑問はないのか質問をしたところ、高校ではコミュニケーション指導の中で様々な活動を体験し、4技能について自分は何が得意で何が苦手かについて考え記録することが多かったので戸惑いはないとのことだった。自分は何が出来て何ができないのかを意識し書き留めていくことは学習への気づきを生み、次への目標につながる。アンケート回答数は少ないが指導強化の必要性や、教科書内容に沿ったポートフォリオがあれば学生も疑問を持たず活動の一つとして取り組め

るのではないかという教育的示唆が得られた。

統計による検証と学生へのアンケートから、異文化への興味関心が学力向上への鍵となると示された。ここから動機および学力向上のきっかけをつかめると期待できる。4か月弱で英語学習者に対する新しい視点を十分に与えることができなかった可能性もあるため、引き続きデータ収集および検証を継続していく必要がある。

7 まとめ：成果と課題

本研究ではCEFRおよびELPを参考にしたポートフォリオを用いた指導が、大学生の英語学習に対する動機付けおよび学力向上につながるか検証した。以下リサーチクエスチョンに沿ってまとめる。

(1) ポートフォリオを用いた指導を受けた学生のほうがそうでない学生より、国際的志向性や英語学習に対する動機が高くなるか。

(2) ポートフォリオを用いた指導を受けた学生のほうがそうでない学生より英語力が上がるか。

主要因の検証結果ではクエスチョン(1)および(2)ともに有意な差は見られなかった。一方、異文化間接近一回避傾向の得点が高い学習者にはポートフォリオの使用が学力向上に有効であると同時に使用しなかった際に得点が下降した。この要因は今後継続して検証していく。

学生へのアンケート調査では肯定的な意見が過半数だったが、人数が少ない事やポートフォリオ使用の意義が必ずしも理解されていなかったことなどから今後改良する必要性が示された。今回の検証結果ではポートフォリオが有効であるということを示すことは出来なかった。一方、4か月だけのデータであり、動機変化をみるには短いとも考えられる。そこで2012年度は1年間を通してみるため、後期も引き続きポートフォリオを用いるよう指導している。ただ、指導者の変更によるポートフォリオの指導頻度や指導内容に一貫性が持てないという課題もある。

今回の検証の成果は教育的示唆が得られたことである。まずポートフォリオが異文化間接近一回避傾向高群においては、ポートフォリオを使用しないことが学力低下につながるが分かった。また、

入学前の指導がポートフォリオ指導への取り組みに影響をすることが自由記述アンケートで示された。ポートフォリオの有効性を伸ばし、広めるためには、ヨーロッパ日本語教師会(2005)が指摘しているように、広く全体的な(日本では全国的な)動きになることが必要である。教科書に準拠したポートフォリオが準備されれば、教師間の指導のずれが防げるだろう。

一方課題として、明確な有効性が見られなかったことや教育現場での使用について課題が見られた。ポートフォリオを導入するには学習者が自分のスキルに気づき自己評価する指導が必要であり、教員自身にその経験がない中で、日本に導入するには、まず教員研修から行わなければならないだろう。一人ひとりの学習者に見通しのある学習をさせ、世界で通用する英語力の向上には理想的な理念(CEFR)とツール(ポートフォリオ)であることを考えると、実践研究を進めていくことに意義があると考えられる。

〈謝辞〉

本研究は平成23年度科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号23520765の研究の一部である。本研究課題遂行の機会を与えていただいた事に感謝する。研究に協力してくださった方々、特にCan Doリストの改編に当たり、ご助言くださった高田智子氏(明海大学准教授)、菊池優子氏(English Pier主宰)市川容子氏(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校英語講師)にお礼を申し上げる。

〈執筆分担箇所〉

1～3章は米田佐紀子、4章は西村洋一が分担執筆し、5,6章は共同執筆した。

〈参考・引用文献〉

Cambridge Assessment 2011. YLE Cambridge Young Learners English Tests, Examination Report 2011. https://www.teachers.cambridgeesol.org/ts/digitalAssets/117348_2011_YLE_Report.pdf. (参照2012-10-09).

CiLT, The National Centre for Languages. My Language Portfolio. European Language Portfolio-Junior version: Revised edition. 2006. p.26

Educational Testing Service. "英検取得者のTOEICスコア". 2001, http://www.toeic.or.jp/toeic/pdf/data/TOEICSTEP_2001.pdf, (参照2010-4-29).

Educational Testing Service. "TOEIC BridgeとTOEICテストのスコア比較表". 2006, http://www.toeic.or.jp/bridge/pdf/data/Comparison_Bridgeand_TOEIC.pdf, (参照2010-10-13).

外国語能力の向上に関する検討会. "国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策". 文部科学省, 2011. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm, (参照2011-10-1)

慶応大学外国語教育研究センター. "行動中心複言語学習プロジェクト". 2005-2009, <http://www.flang.keio.ac.jp/>, (参照2011-10-10).

日本独文学会ドイツ語教育部会、日本フランス語教育学会、大学英語教育学会教育問題研究会、神保科研、酒井科研、大崎科研. CEFRの日本への文脈化を考える 第2回テーマ「ポートフォリオ」. 2011英独仏合同シンポジウム発表要項 p.1-74

橋本重治. 新・教育評価法総説(上). 1983,金子書房, p.403., ISBN-10: 4760890513

物井尚子. 小学生を対象とした情意尺度の開発(2). 東京純心女子大学紀要. 2009, 第13号, p. 27-36

森下玲子. ケンブリッジ英検KET——完全攻略ガイド. マクミランランゲージハウス. 2005, p. 177. ISBN-10: 4777360245

文部科学省. "『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定について". 2002, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm, (参照2009-8-26).

根岸雅史. CEFRの日本人学習者への適用可能性とそこから見た日本人学習者のレベル. 第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基盤研究. 平成16年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書. 2008. p. 399-414

University of Cambridge ESOL Examinations. "Cambridge ESOL exams and the CEFR: The empirical perspective". 2009, <http://www.cambridgeesol.org/what-we-do/research/cefr/empirical-perspective.html>, (参照2010-4-29)

University of Cambridge ESOL Examinations. Flyers Sample Paper. 2011, <http://www.cambridgeesol.org/assets/pdf/exams/yle/yle-flyers-reading-writing.pdf>, (参照2011-04-01)

吉島茂、大島理枝(訳・編). 外国語教育II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠. 2004,

朝日出版社. p.251. ISBN-10: 4255002932

Yoneda, Sakiko. & Hughes, Jason. A Research Toward Establishing Hokuriku Gakuin Standard Using a Global Standard—An Investigation into the Growth of Japanese Students' English Abilities across Different School Levels—. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部紀要 第3号, 2010. p.99-110.

ヨーロッパ日本語教師会. "日本語教育国別事情調査 ヨーロッパにおける日本語教育とCommon European Framework of Reference for Languages". 国際交流基金. 2005, <http://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/ceforfl.pdf>, (参照2012-10-7)

〈注〉

- 2011年6月に文部科学省の「外国語能力の向上に関する検討会」が公表した「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」で参考としてCEFRを挙げている(外国語能力の向上に関する検討会2011)。
- 森下2005: vi-vii, Educational Testing Service (2001, 2006), University of Cambridge ESOL Examinations (2009)を参考に作成した。
- 米田佐紀子(北陸学院大学、研究代表者)、物井尚子(千葉大学)、西村洋一(北陸学院大学)、細川真衣(北陸学院大学非常勤)
- Flyers受験者の平均年齢は10.9歳であった(Cambridge Assessment 2011)。
- 項目28については理由を自由記述で求めた。
- この分析においては分析に使用する人数を最大化するため、分析に必要なデータのそろった参加者をすべて含めた。そのため、37名(ポートフォリオ使用群12名、ポートフォリオ未使用群25名)を使用した。
- 異文化間接近一回避傾向得点の中央値は3.14であり、この値未満を低群、それ以上を高群として参加者を割り当てた。ポートフォリオの使用、未使用群と異文化間接近一回避傾向の高低群を組み合わせた人数は使用・高群で6名、使用・低群で6名、未使用・高群で15名、未使用・低群で10名となった。

資料1 ポートフォリオ

1-1 Language Passport (二つ折りにしてファイルに綴じこむため左右のページが逆になっている。)

1-2 Language Biography書き方例

3. my language passport 私の言語パスポート

このパスポートには次のものを記録します。

①裏ページの Can-Do リストで自分の今できることを知り、目標を立てましょう。

②外国語で出来るようになったこと。合格した検定などをそのレベルのところに書き込みましょう。

レベル	聞くこと	読むこと	会話・スピーチ	書くこと
C1				
B2				
B1				
A2				
A1				
Pre-A1				

③異文化体験や出会い

★CEFRとは Common European Framework of Reference for Languagesの略で、日本語訳は「言語のためのヨーロッパ参照枠」です。これは外国語に関するヨーロッパ共通の枠組みで、現在、47カ国でこの考え方が取り入れられています。CEFRでは、外国語能力を「出来る事」のレベルで分けています。外国語の授業や難易度も、ひとりひとり外国語能力も、すべてこのレベルで表すことができるようになりました。フランス人のメキンは英語はB1レベル、トルコ語がA1、といった具合です。オーストラリアの大学はC1レベルがあれば入学許可、イギリスでも大学によってB1, B2などで入学の目安としています

<主な参考文献>

・ Council of Europe, European Language Portfolio—Junior version: Revised edition. (英語および日本語版「私の言語ポートフォリオ」). English Time 1 & 2, Magic Time 1 & 2. Oxford University Press. (first edition), University of Cambridge ESOL Examinations. 2007. Cambridge Young Learners English Tests Handbook, Starters, Movers, Flyers., 吉島・大塚(2004). JACET 教育問題研究会(2011). 金沢大学外国語研究センター (2011). 慶徳義塾大学外国語研究センター(2006)地

page 4

School _____
 Year _____ Class _____ No. _____ Name _____

My Language Portfolio (私の言語ポートフォリオ)

ここにはあなた自身の学習の進歩を記録していきましょう。

1. my language biography 言語経歴・学び方

①今までに学んだ外国語は、行ったことのある国、将来行ってみたい国は？外国語を勉強する理由は？

②私の外国語の学び方(好きな暗記法やアクティビティ、苦手なことなど)

③そのほか外国語で出来るようになったこと(例:ほいしものと言える。メールが書ける。サイトが読めるなどなど)

2. my dossier 私の作品集

自分の書いた作文や手紙・スピーチ・日記などファイルにておきましょう。

page 1

STEP 英検	CEFR	聞くこと	現在 一年後	読むこと	現在 一年後	会話に参加すること 口頭で自己表現すること		現在 一年後	書くこと	現在 一年後
						現在	一年後			
1級	C1	順序立ててわかりやすく構成されていなくても、長い話を理解でき、テレビ番組や映画が理解できる	14	14	色々な種類の高度な内容のかなり長い文を理解し、内容を把握できる	14	14	14	14	14
準1級	B2	自分の専門分野なら複雑な議論でも理解することができる(ニュースについてなど)	13	13	具体的または抽象的な話題の、複雑な文章の内容を理解できる(新聞記事や小説など)	13	13	13	13	13
準1級 2級	B1	メッセージの要点を理解でき、口頭または文字でまとめることができる(テレビ番組など)	12	12	文章を読んで、口頭または文字で要約したり、翻訳したりすることができる(インターネットの文章や雑誌の記事など)	12	12	12	12	12
		よく知らないことながら含んだメッセージを聞きとり、込められた気持ちを理解できる(知らない言葉の出てる物語など)	11	11	よく知らないことながら含んだ文章を読み、込められた気持ちを理解できる(外国の日常生活など)	11	11	11	11	11
2級 準2級	A2	少し長いメッセージを聞きとり、その人の意見が理解できる(交流のある学校からのビデオメッセージなど)	10	10	少し長い文章を読み、そこに書かれている人の意見が理解できる(メールや手紙など)	10	10	10	10	10
		過去や未来について話されていることが理解できる。休日にしたことや予定(Lucy might come to the party.)など。	9	9	少し長い文を読むことができ、過去、未来の出来事の区別がつく。(誰かの一日 Lucy has forgotten where she put her pencils.)など	9	9	9	9	9
3級 4級	A1	短いメッセージでも、要点や簡単な意見を聞きとれる。好き嫌いについての話(That smell makes me hungry.)など。	8	8	少し長い文章でも、要点や簡単な意見を読みとれる。海外の友達が自分のこと(If it's sunny, we go swimming.)を書いた手紙など	8	8	8	8	8
		短いメッセージなら、要点や程度の細かいことを聞きとれる。人や物についての説明など(What is your teacher like?).	7	7	友達や学校で一日について(You could invite Robert to the game.)短い文なら要点やある程度細かい事が理解できる	7	7	7	7	7
5級	Pre-A1	短いメッセージなら大切なポイントを聞きとれる。電話の伝言(How about going to the park tomorrow?)や天気予報など。	6	6	簡単な短い文章なら、要点を理解することができる。ハガキやメールの短いメッセージ(This is the dog I bought at the shop.)等	6	6	6	6	6
		身近な語句がある程度理解することができる。自分や家族(My mother talks a lot.)、学校のことなど。	5	5	身近な表現を読んで理解することができる。もの説明(Your house is bigger than mine.)、ペットについての文など。	5	5	5	5	5
Pre-A1	Pre-A1	身近な語句をいくつか理解することができる。先生の指示や、曜日、数(She has two new animals.)など。	4	4	身近な言葉を見つけて読むことができる。身の回りのもののラベル、日付や天気(What was the weather like?)など。	4	4	4	4	4
		身の回りの物についての文(What is your name? This is a book.)などの文を理解することができる。	3	3	色・動物・物の名前(banana など)についての文(Do you like cats?)など聞かれたら、(Yes/No or dog)など答えることができる。	3	3	3	3	3
Pre-A1	Pre-A1	数(13~60)や文房具(pen, book)、家族関係(He is my father.)などの文を理解することができる。	2	2	sun, hand など 3~4 文字程度なら色や物の単語の単語を読むことができる。	2	2	2	2	2
		数(1~12)や tree, flowers、形(circle)など身の回りの物の名前を言われたら何を指しているか分かる。	1	1	アルファベットの太文字と小文字を読むことができる。	1	1	1	1	1

「聞くこと、読むこと、会話に参加すること、口頭で自己表現すること、書くこと」の4つそれぞれについて、「現在の自分」「学年末の目標」を1~14の中から自分ができる最高のレベルをつけてください。

page 2



資料2 英語学習動機に関する質問項目

1. 英語を使って界中の人たちと会って話をしたいですか。
2. 英語を使って世界中の人たちやその暮らしについて知りたいですか。
3. 英語を使って世界中の人たちと一緒に仕事がしたいですか。
4. 英語を使って世界中の人たちと友だちになりたいですか。
5. 日本でも海外でもその人が住んでいる場所に関係なく、外国の人たちと友だちになりたいですか。
6. なるべく、外国の人たちと話さないようにしていますか。
7. 学校に外国からきた友だちがいたら、話しかけようと思いますか。
8. もし、外国の友だちができて、しばらく家に泊まることになったらいいと思いますか。
9. 近くにすんでいる外国の人たちに親切にしたいと思いますか。
10. もし、となりの家に外国の人が引っこしてきたら、なんとなくいやな気持ちになりますか。
11. レストランや駅で、日本語のできない外国の人たちがこまっていたら、助けると思いますか。
12. 自分の町にずっと住みたいです。
13. 日本だけではなく、いろいろな国に住んでみたいです。
14. 外国の人たちがたくさんいるところで、はたらいてみたいです。
15. 外国でボランティア活動をやってみみたいです。
16. 外国のできごとは自分の生活とあまり関係がないと思いますか。
17. 将来外国に出かけることの多い仕事をするのはいやですか。
18. ふだんテレビで世界のニュースを見ますか。
19. ふだんインターネットで世界のことをしらべますか。
20. ふだん新聞や本で世界のできごとを読みますか。
21. ふだん家族で世界のニュースについて話しますか。
22. ふだん友だちと世界のニュースについて話しますか。
23. 英語は好きですか。
24. 外国に行ってみたいと思いますか。
25. 英語は将来自分に必要だと思いますか。
26. 英語で実際に外国の人とコミュニケーション（メール、手紙、電話、会話など）したいですか。
27. 英語で実際に外国の人とコミュニケーション（メール、手紙、電話、会話など）している、あるいは、した事がありますか。
28. 学校の英語の授業はメールや会話など世界の人々とコミュニケーションする実用的な英語力をつけるのに役に立っていると思いますか。
29. あなたが英語を勉強する理由は入学試験のためですか。
30. あなたが英語を勉強する理由は教科だからですか。
31. あなたが英語を勉強する理由は将来のためですか。
32. あなたが英語を勉強する理由は英語や異文化が好きだからですか。
33. あなたは英語の勉強をしたくないですか。
34. あなたは英語の勉強は不必要（いらぬ）と思いますか。